

日本禅宗における衆生の成仏と供養の問題

駒沢女子大学 安藤嘉則

日本仏教においては「供養」という宗教儀礼が「成仏」と結びつき、独特の衆生（有情）観を形成している。それは衆生・有情の枠組みから非情へと成仏の適用範囲を拡大させたものであり、本発表では、こうした観点から日本の禅宗における有情と非情（特に動物と草木）の成仏・供養について検討していく。

禅宗に限らず日本仏教では、三十三回忌までの追善法要など、独自の供養文化が成立しているが、日本禅宗における動物や草木の供養に関する資料としては、中世臨済宗の清規文献である『諸回向清規』（16世紀）に、「畜生通回向」、「畜生掩土荼毘回向」が記され、また七七日塔婆に「塔婆之文」として「一仏成道、観見法界、草木国土、悉皆成仏」が用いられ（巻6）、「流灌頂之神咒」では、南無救苦難馬頭観音西方阿修羅仏とあって畜生救済の馬頭観音の位置付けがなされている。

一方、曹洞宗では、「切紙」文献の中に「畜生授戒法」が伝わり、その内容は、禅僧が「一切衆生悉有仏性」の理を観じて動物に法名を与えて三帰戒を授け、「清浄仏地、頓証菩提心」を三唱「南無持地菩薩」「南無観世音菩薩」を唱えるものである。これらは近世から近代にまで伝授されている。

禅僧の語録類で畜類供養に関する法語はほとんど見られないものの幕末の曹洞宗の月潭全龍の語録には「聞修寺赤猫頓死塔婆銘」が収録され、「赤斑牡猫霊」の供養のため、「如是畜生発菩提心忽爾出離毛窟、遽然遊戯安養」という経文の引用と法語が作られている。月潭はその会下に西有穆山を出し、近代の『正法眼蔵』参究の礎を築いた存在であるだけに禅僧の日常の一端を示す興味深い資料といえる。

こうした近世までの禅籍を見る限り、禅宗では上記のように動物（畜生）供養が行われていたものの、草木供養に関する法語や儀則等の資料は未見である。むしろ草木成仏の思想は天台本覚法門の重要な思想であり、『正法眼蔵抄』（詮慧・経豪）の抄文、前出の『諸回向清規』の塔婆銘等に、「一仏成道、観見法界、草木国土、悉皆成仏」の経文が引用され、草木成仏は理念として受容されているが、草木供養という具体的な宗教儀礼として成立していたかどうかは不明である。

しかし近世以降、各地域で犬猫牛馬の畜類の他、魚類（鮪・鯨・鰻）・蚕といった動物供養がなされていったのであり、各地に動物供養塔が建立され、さらには草木塔、生物以外の針や茶筌などが広がりを見せ、近代以降もさらに建立が続けられている。これらの供養塔建立に当たり禅宗の僧侶が関わる場合も多いのであるが、禅宗でなければならない必然性はない。こうした動物供養、草木供養、モノ供養の目的には、動植物に対する鎮魂と感謝の二つの側面があり、動物実験供養の場合は前者、ペット供養の場合は後者ということになるろう。